

劉先生の話は、黄土高原来信の第一部でも紹介されました。読まれた方も多いかと思います。劉先生の話では、中国農村部の厳しい教育事情が見え、周路先生が陝北の女の子を紹介したいと思った気持ちが分かるかと思ってもう一度掲載します。田井

北山小学校が新学期を迎えました。けれども、劉先生の姿が見当たりません。先生を辞めたという噂です。ここでの仕事がどのような、どんな待遇なのか、どうして先生を辞めたのか等の理由は私が一番よく知っています。

土崗県の北山小学校は規模もかなり大きく、34人の児童が勉強しています。《陝北女娃》という本を纏めるため、私はここに数回ほど取材に訪れて写真の撮影をしました。北山小学校には天真爛漫で、顔立ちもいい可愛らしい女の子たちが結構いるのです。例えば、陝北特有の“まつげ*ちゃん”の芳芳、人に会えば笑顔がこぼれる“えくぼちゃん”の海海、お母さんの再婚で山西省から来た、真ん丸い大きな目で前歯のない文文。それに物静かでおとなしい欢欢、勉強大好きで考え深い彩彩などなど。私は彼女たちが学校で勉強をしている様子、放課後の遊んでいる姿、家庭環境を撮影し、彼女たちと話しもして、家族構成や年齢、普段楽しんでいることや将来の希望などを知りたいと思っていました。

*原文：毛眼眼 陝北の人は、眼が大きくてまつげの濃い人が多い。

作業が順調で、収穫も可なりあるのは、全て劉先生の熱心な協力と取り計らいのお陰なのです。私が

学校を訪ねると仕事を置いて、私が取材したいと思っている子どもたちに会えるよう計らってくれ、それぞれの子どもの学習状況や性格などを進んで話してくれるのです。

劉先生がこつこつと心を込めて指導の準備をし、授業を進めている姿を忘れられません。一間きりの粗末で薄暗い窑洞に、30人を超す子どもたちがひしめいています。机は1台に3人だったり、学齡前の子どもたちはなんと1台に4人が座っています。彼女が教科書の読みを指導すれば、朗読の音がわんわんと耳を聳るばかりに響きます。30何人かの子どもたちの汗の匂いが教室に充満し、空気も淀んで息も詰まりそうです。けれども、劉先生は楽しくてたまらないといった風で、3年生に国語を教えるかと思えば、2年生に算数を教え、1年生に地理を教えているかと思えば、学齡前の子どもに拼音(中国語の発音記号)を教えるといった具合でてんてこ舞いをしています。

実は、劉先生自身もまだ大人になりきらない少女で、自称では、「今年、18歳」といっていますが、実際はまだ18歳にもなっていないのではないのでしょうか。彼女もかつては夢があり、美しい人生に憧れて街に出て仕事をしたいと望んでいましたが、現実が彼女の美しい憧れを打ち砕いてしまいました。劉先生は黄河河畔の劉家山村の出身ですが、この辺りの女の子の殆どは小学校を終了すると進学は



北山小学校の子供達と一緒に

せずに家庭に留まり、彼女のような、成績優秀で県の中学校に合格するケースはあまりありません。それにこの貧しい山村では試験に受かったとしても、進学できるかどうかは家庭の経済状況と家長の考え方によって決められてしまいます。

劉先生の父親は、女の子が上級学校に進学することの意義を全く認めない人でしたが、母親の方は娘の気持ちを理解し、密かにお金を出して娘が県市(県庁所在地のある市)で勉強を続けられるようにしました。街の学校での勉強は厳しく、生活もまた苦しいものでした。彼女の一月の生活費はたったの20円で、これは一日平均1元にもならないということです。しかも学用品や生活用品を購入しなければなりません。彼女がいったいどんな風に毎日を過ごしたのでしょうか。私に語るところでは、一日に1個の蒸し饅頭(小麦を丸めて蒸したもので、中に餡はない)を買うだけで、というのも蒸し饅頭は比較的大きいので、半分は昼食として食べ、夜に残りの半分を食べ、朝はお湯を飲むだけで過ごすこともしばしばだったそうです。おかずは家から持ってきた漬物だけで、それもなくなくなってしまう補給出来ないのはいうまでもありません。このようにしてどうにか中学2年を終了しましたが、3年生になっても、父親は彼女が勉強を続けることを強く反対し、高等学校に合格しても気持ちは変わらないと言います。劉先生はすっかり気落ちして、どうにか頑張ってやっと2年前に中学を卒業すると、学校に未練を残しながら黄河岸辺の村に戻ってきました。

山村の中学卒業生は歓迎され、すぐさま村のある小学校の先生に迎えられ、半年後に又別の小学校の先生になりました。北山小学校はこの2年間で3番目の小学校です。これは劉先生の落度でもなく、教師としての力量が足りないからでもなく、報酬に関わることです。読者の皆さんは、この忙しい仕事の毎月の給料が、一袋の小麦粉と100元と聞いたら気持ちが寒くなるでしょう。ここでの教師は、国語、算数、歴史、地理、常識、音楽、美術などの科目全てを教え、しかも、1年生、2年生、3年生と学齢前のクラスに分けて教えなければなりません。ある所では4年生のクラスも受け持ち、一週間の間に休日はなく、仕事は毎日、朝6:00に始まる早朝勉強から、夜間の自習に至るまで続く激務です。しかも



2005年の劉老師

せずに家庭に留まり、彼女のような、成績優秀で県の中学校に合格するケースはあまりありません。それにこの貧しい山村では試験に受かったとしても、進学できるかどうかは家庭の経済状況と家長の考え方によって決められてしまいます。

劉先生の父親は、女の子が上級学校に進学することの意義を全く認めない人でしたが、母親の方は娘の気持ちを理解し、密かにお金を出して娘が県市(県庁所在地のある市)で勉強を続けられるようにしました。街の学校での勉強は厳しく、生活もまた苦しいものでした。彼女の一月の生活費はたったの20円で、これは一日平均1元にもならないということです。しかも学用品や生活用品を購入しなければなりません。彼女がいったいどんな風に毎日を過ごしたのでしょうか。私に語るところでは、一日に1個の蒸し饅頭(小麦を丸めて蒸したもので、中に餡はない)を買うだけで、というのも蒸し饅頭は比較的大きいので、半分は昼食として食べ、夜に残りの半分を食べ、朝はお湯を飲むだけで過ごすこともしばしばだったそうで

このことを関係部署で訊ねて回りましたが、どこからも明確な答えは得られませんでした。

最近又、私は黄河岸辺の劉家山村を訪れ、何もしないで家にいる劉先生を見て、もう一度教師を務めてみたらどうかと勧めましたが、逆に劉先生に問い返されてしまいました。「給料が支払われないばかりでなく、指導に使う教科書や白墨の類に至るまで全部自分で用意しているのです。どうして教え続けられますか?」。私は返す言葉もなく、黙って“義務”という二文字を考えました。“義務”とは一体どんな意味なのですか?

私は劉先生にはアンケートに答えてもらいませんでした。私が劉先生と知り合ったときには既に学校を卒業し、既に社会人になっていたからです。そしてこの厳しい現実には先生が再びロマンチックな未来を思い描く何の力にもならないでしょう。(田井訳)



劉先生と周路先生の娘(左)